

近畿大学理工学部 正会員 江藤 剛治

大阪大学大学院 正会員 玉井 昌宏

近畿大学理工学部 正会員 竹原 幸生

近畿大学大学院 ○学生員 濱田 哲司

1. はじめに 既往の研究により、河川はその周辺地域に、気温、風、湿度、快適性等の影響をおよぼしており、大河川ではその影響範囲は数百mということが観測により明らかになっている。本研究では河川周辺住民が心理的に、河川の影響範囲をどのように感じているかをアンケートにより調査する。その結果と、上記の観測によって得られた結果を比較検討し、沿川幅の定義付けに役立てる。

2. 調査方法 守口市西南の淀川周辺地域を、図-5のようにメッシュ（1メッシュの大きさ 500m × 100m）状に区切り、一つのメッシュにつき 10 個、合計 390 個のアンケートデータを家庭訪問により取得した。アンケート概要を表-3に示す。

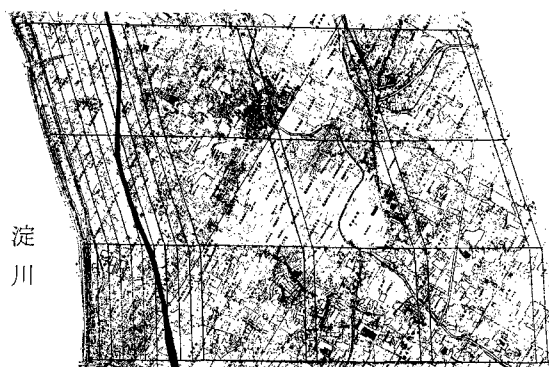


図-5 アンケート現場

表-3 アンケート概要

項目	調査概要
1 対象地	守口市西南の淀川周辺地
2 対象者	淀川周辺の住民
3 調査期間	11月20日~12月4日
4 調査方法	家庭訪問法
5 回答数	300
6 質問事項	質問内容
属性	・性別 ・年齢 ・居住年数 ・就業状況
淀川による自宅周辺環境の影響	・快適性 ・気温 ・湿度 ・風 ・生物
淀川の利用方法	・交通手段 ・利用目的 ・頻度 ・所用時間
淀川に対する意識	・改善 ・洪水の危険性 ・水質 ・利用の危険性
自然に対する意識	・生活に関係のある自然

3. 結果と考察

① 淀川による自宅周辺環境の心理的影響と距離

図-6より、快適であると回答した人の割合は、淀川からの距離が 0.1km の地点で、最も高く 76.7% あった。距離 0.2km 地点になると 50.0% となり、1.0km までは 40% 程度となっている。

風、気温、生物に変化があると回答した人の割合は、淀川からの距離が 0.1km の地点でそれぞれ最も高い。また 0.5km ~ 0.6km 地点で最小になり、0.7km 地点でもう一つのピークがある。また 2.0km 以降はそれぞれ 10% 以下となっていた。

気温、風、生物は、グラフ形がほぼ一致している。また割合が最小になる原因として、交通量の多い国道が考えられる。すなわち、図-5に示すように、河川から 500m ~ 700m のところを大きな道路が通っているからであると考えられる。湿度は、距離による割合の増減はほとんどみられず、ほぼ一様に 20% と低い。これは湿度の多少の変化は知覚し難いよう

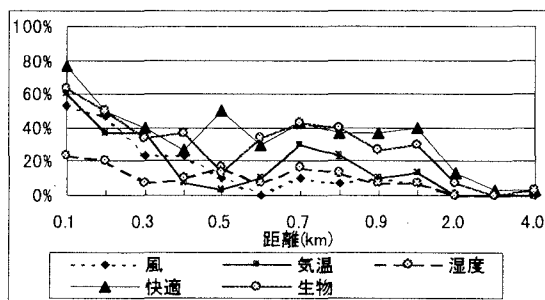


図-6 淀川による自宅周辺環境環境の心理的影響

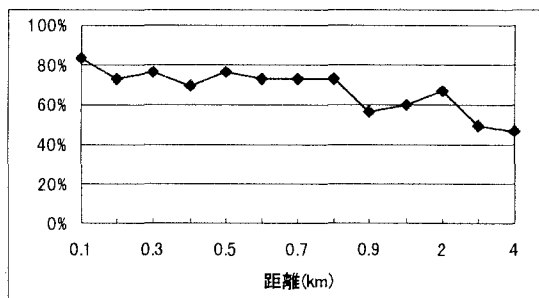


図-7 淀川の利用と距離

Takeharu ETOH, Masahiro TAMAI, Kohsei TAKEHARA, Tetuzi HAMADA

で、普段から湿度を認識している人が少ないためと考えられる。

②淀川の利用と距離

図-7より、近年に家族の内誰かが淀川を利用したことがある人の割合は、0.1km 地点でもっとも高く 83.3%であった。それ以降割合は減少していくが4km地点でもほぼ50%の割合がある。

図-8より、徒歩の割合は、0.1km 地点がもっとも高く 81.3%である。0.2km 以降からは、徐々に減少していき、4.0km 地点で 8.3%になっている。自転車では0.1km 地点から、徐々に増加していき、0.6km 地点でピーク 57.1%のピークを迎え、その後は再び減少している。車では0.1km の地点ではわずか6.3%しかなく、距離が大きくなるにつれて徐々に増加し2.0km~4.0kmでは70%以上に達する。

③淀川に関する意識

図-9より、洪水の危険性を感じている人の割合は、距離による増減は見られず、ほぼ一様に50%となっていた。また河川敷を利用する上で危険を感じたことがある人の割合も、同様に30%程度であった。

図-10より、淀川の水質、淀川の改善に関心をもっている人の割合は、距離に関係なく、約80%であり、ほとんどの人が関心を持っている。また改善に協力できると答えた人は、改善に関心をもっている人の約半分程度で、具体的な答えとして、自分のゴミは持ち帰る、家庭排水に気を使うなどが多かった。

④自然に関する意識

図-11より、生活に関係している自然環境を選択式で回答してもらった結果、河川敷公園、河川と答えた人の割合は、0.7km以下では30~60%であるが2.0km地点以降は20%以下に緑地公園と答えた人は淀川との距離に関わらず20~50%の値をとる。淀川から1km 以内に居住している住民は河川や河川敷公園を最も身近な自然と感じている。

4. まとめ 淀川の影響によって自宅周辺の快適性、

気温、風、生物に関する住民の意識は、距離が大き

くなるに従い減少する、0.4km までは顕著な影響が現れる。2.0km 地点になるとほとんど影響は見られなくなった。さらに気温、風、生物に対する意識は同様のパターンを示す。大きな道路等が間に存在すると河川に対する住民意識の影響は影響を受ける。湿度は、知覚するのが難しいようで、気象観測の結果のように河川からの距離により変化する関係は見られなかった。

参考文献 1)北川明, 島谷幸宏, 渡辺祐二: 河川周辺の気候の快適性, 土木後術資料, 31-10, 河川環境特集, pp38-43 (1989)

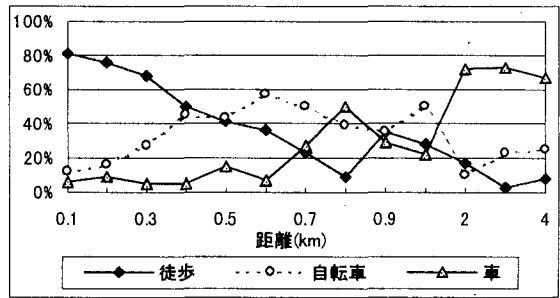


図-8 交通手段と距離

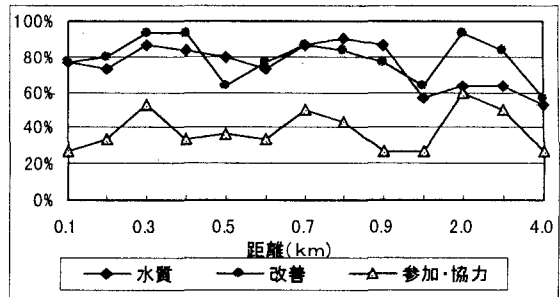


図-9 洪水の危険性と距離

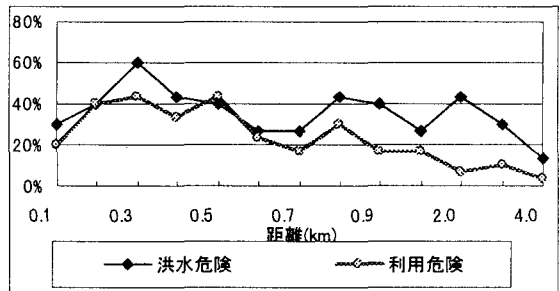


図-10 淀川に対する意識

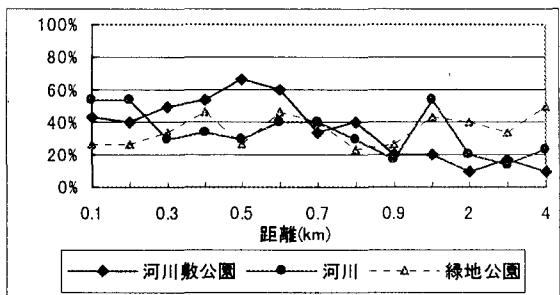


図-11 生活に関係のある自然